貧賤の身から發奮して女學校の教師に！

永代美知代

『一寸あなた、中塚先生が御危篤ですつて！』
『まあ本當？　いよ〳〵御危篤なの？』
『もうとても駄目らしいわねえ、どうしませう？』
寮舎のグラウンドで出會つた二人、廊下で行き逢つた三四人は、みな一樣にひそ〳〵と聲をひそめて、顔をくもらせました。
『神樣は何故、あんな好い立派な中塚先生をお助けなさらないのでせう？』
『あんな立派な先生が今おなくなりなすつたら、それこそ私達はどうして好いか解りやしないわ、まるで木から落ちた猿同樣よ。』

『本當に神樣の御心が解らない！　私達がこれほどまでに思つて、夜晝お願ひしてるのに、もしどうしても中塚先生の御命を助けて下さらない程なら、ねえ、皆さん、この世に神さまも何もありやあしないわねえ。』
『さうよ本當に！ですけれども、今一度祈りませうよ、熱誠こめた祈禱會を開きませうよ、ねえ今一度！』
彼處の部屋でも、此處の部屋でも、思ひ〳〵に打ち寄つては、神の御前に泣きながらの祈を捧げてゐます。

『おゝ神様、盈世界の事、何ごとも御心のまゝならぬはなき大御神よ、どうぞ哀れなるわれ等をあはれみたまひ、今此處に泣いて捧げ奉る心の願ひを聞きたまへ、おゝ神様、あなたの大いなる愛の御手を、われ等が最も敬愛するところの恩師中塚先生の上におきたまへ、先生は今瀕死の病床に苦しんで……おゝ神様、あなたは何事をもしろしめす。どうぞ我等の心をあはれみ給ひて、我等が愛する先生に、今暫らくの命をたまはりますやう、先生の上にもしもの事がありましたなら、おお神様、我等、我等は……』

祈るものゝ聲はをのゝいて終には言葉もなく、熱い涙の玉はとめどもなく、はらはらと疊の上にはふり落ちる——。

斯うした熱誠と、斯うした熱い涙を以て、ひたすらにその全快の日を祈られつゝある中塚先生とは誰？　その身の上話のあらましを、いでや溯つて記して見ませう。

もう幾年か前のこと、〇〇女學院の生徒の間

に、ふとしたことから次のやうな話が傳はりました。はじめてそれを聞いた丹波產れの河本さんは、さも一大事件でゝもあるかのやうに、

『あらまあさう！　驚いた、穢多ですつて？　一寸あなた、本當のこと？』

と、丸顏の愛くるしい、いとゞつぶらな其眼をみはつて、對手の顏を見守りました。

『えゝえ本當ですとも、こんな事冗戯になんか云はれやしませんわ、嘘だつた日には、それこそ罪惡だわ——私これでゐて、まだそんな惡人ぢやないつもりよ。』

『あら、御免なさいよ秋山さん、中塚さんと同郷のあなたの仰有ることですもの、私疑つた譯ぢやないのよ。けどもね、あんまり思ひ掛けない事だもんだから、ついあゝも云つたのよ。』

『私もね、此校へ來た當初にね、あの人を見て吃驚しましたものね、おまけに級長さんで威張つてるんだから驚きましたわ、神戸と明石ぢや、つい目と鼻の近間ぢやありませんか、いくら知れないつもりでゐたつて、如何したつて解りますわねえ、本當に何て圖々しいんでせう。』

中塚幾子と同じ明石の町から來てゐる秋山さんが、ふとした機會で斯うした事を無邪氣な河本さんと話し合つて以來、講堂でも寮舍でも、中塚幾子の身元について、種々の噂が傳はりました。

『嫌なことね、下駄はいれの娘なんかを級長だなんて！』

『ちよいと、穢多つて變な臭氣がするつて云ふわね、私あの人の傍なんか嫌だわ、可哀さうにねえ、佐藤さんはまだ何にも知らないのよ、平氣で中塚さんと机を並べて坐つてるわ。』

『フフフ、今に屹度嫌がりますよ。』

中塚幾子は全く穢多の娘に相違ありません。或る年、明石の町へ避暑してゐた此校の宣教師のミス。ブラオンが、海岸の松原で來る日も〳〵、たつた一人熱心に讀書してゐる少女を見つけて、だん〳〵話

すうちに、その哀れな身の上に同情し、悧巧な性質を惜しんで是非に勉強させて見たいと、賤しい下駄歯入れや渡世の父の手から引き取つたのが、中塚幾子です。

朝に晩に、宣教師の寢室から書齋のお掃除を受持つて、時間々々の校鐘鳴らしに、授業中他人よりも五分づつ早めに教室を出なければならぬ幾子の成績は、受持の先生方が驚ろかれる位の出來で、いつも滿點のとりつゐけといふ有樣でした。おまけに、うまれついての物やさしさは、溫雅、貞淑、謙遜、あらゆる女德を兼ね備へてゐるやうに見えました。

斯うして中塚幾子は、級長としてあげられたばかりではありません、全校の模範的生徒とさへ呼ばれて居りました。

けれども、それは彼女の身元の知れてなかつた昨日迄の事でして、穢多の娘、はいれやの子と解つた後は、殆んど普通の交際さへ許されなくなりました。

『中塚さん、ちよいと中塚さんてば一寸！』

通りすがりの幾子を、さも〳〵用ありげに呼びとめて、その曇つた顏を意地惡くのぞかうとするものがありました。

『何ですの？』

『おほゝゝこの人つたらまあ如何でせう！ねえ一寸皆さん、御覽なさいよ、ちよいと私がものを云ふと直ぐ、あんなに不安さうな顏をするんだもの、大丈夫よ、御安心なさいだ、誰もあなたのお父樣が、デイデイ屋のはいれやさん——ぢやなかつた、あのうそら、下駄屋でせうなんて訊きやあしなくつてよ。』

『オヤ、それぢや中塚さんのお父樣はアレなのねえ？』

さも呆れたらしく、わざとに一人がこんな事を云ひますと、又一人がしら〳〵しく取りなすのです。

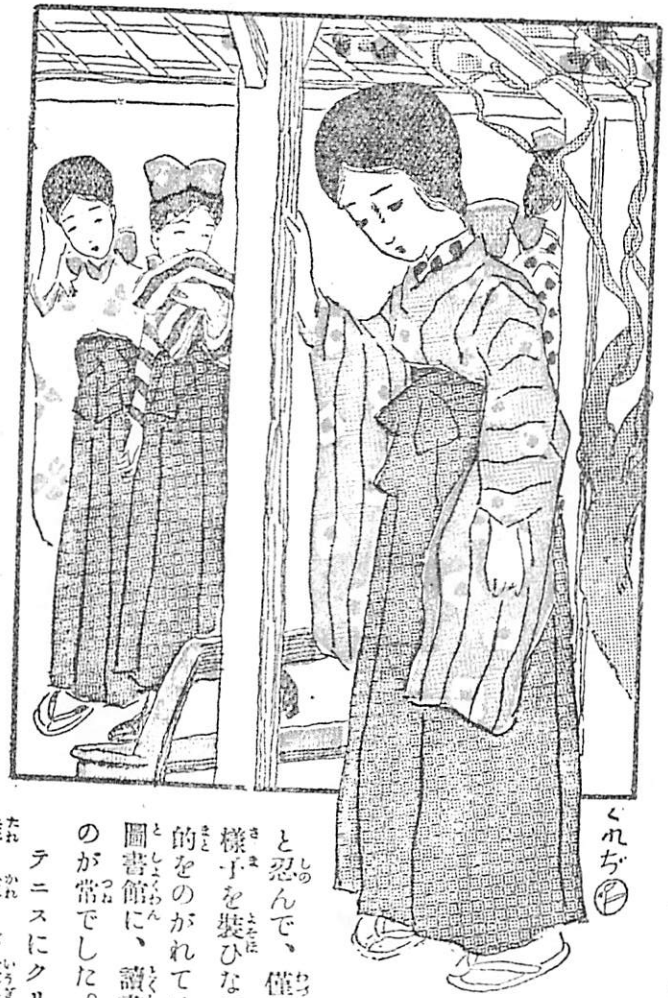
『だつて、どうだか解りやしないわねえ、アレでなきや、下駄のはいれをしないとは限らないわ、時と場合で、普通の人間でも鼓を叩いて廻るかも知れないわねえ、車夫だつて、立ん坊だつて、職業なら仕

方がないぢやないの。』

『だけども、一體から云ふと、昔からはいれやは賤民の商賣に決つてるのねえ。』

『おゝ嫌なこと、嫌なこと！』

いくら忍耐强い中塚幾子だつて、時には身も心もやき盡すほど、むら〳〵と燃え立つ感情をしづめ兼ねました。いつそもう身分不相應な學問など思ひ止つて慈愛深い父母の膝下に泣き伏してしまはうか！と



も思ひました。

ですけれど、幾子はいつも『忍耐は希望を生じ、希望は練達を來す——』と云ふ聖句を思ひ起して、堪へやらぬ無念口惜さをぢつと忍んで、僅かに何氣ない樣子を裝ひながら、嘲笑の的をのがれては、たゞ一人圖書館に、讀書三昧に入るのが常でした。

テニスにクリケットに、誰も彼もが遊戯に夢中である間、仲間はづれの幾子一人は、始終圖書館入りばかりして、雜誌と云はず、書物と云はず、書棚にあ

るかぎりの書物に讀み耽つて居りました。

『ほんとに中塚さんを肺病なんかにしたのは、私達の罪ですわ。』

幾年かの後、同じ大學部を卒業して、中塚幾子女史と一緒に、母校普通科の教師になつていらゞしやる山家先生は、よく斯う仰有り〳〵するのでした。

『いゝえどうして、そんな事があるもんですか、やつぱり私の體が弱いからですよ。』

『ですけれども、あの時分あんなに圖書館にばつかり入れて置かないで、御一緒にテニスでもしたら、よかつたと思ひますわ。』

『いゝえ、そんな事はありませんよ、皆さんと一緒に騒いでばかり居ましたら、私は今ごろ如何なつてたか知れやしません、私が今日斯うしてゐますのもみんな皆さまのお蔭です、私いつでも、全く感謝してゐますのよ。』

中塚女史はにこやかに、心から感謝してゐるもののやうに見えました。

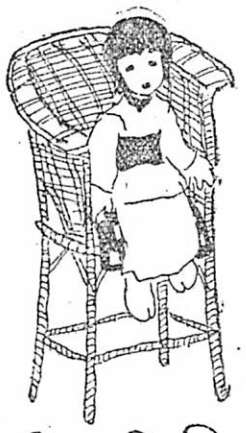
『さう云はれると、なほさらつらくつて……中塚さん、勘忍して頂戴な。』

『ほゝゝ、何でもありませんてば！』

さうした會話を聞くにつけても、今ではもう誰一人、穢多として中塚女史を賤しめるものはありませんん、寧ろ中塚先生の德望は全校隨一で、今や危篤の報に接した生徒一同の悲歎は、親兄弟に別れるそれにも劣りません。

あゝ、中塚先生の重い病は、遂に癒えないのでせうか。

——（をはり）——



ナリられて？